

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K03131

研究課題名(和文)地中海におけるフェニキア・カルタゴ文化の発展と変容

研究課題名(英文) The Development and Transformation of Phoenician and Punic Culture in the Mediterranean

研究代表者

佐藤 育子 (SATO, Ikuko)

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：80459940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：フェニキア人の移動がもたらす文化変容を、先住民の文化との連続性、フェニキア文化とカルタゴ(ポエニ)文化の相違性、ヘレニズム期からローマ期にかけての文化の存続性という側面から考察した。それは、フェニキア人のアイデンティティの形成や発展に関わるさまざまな問題とも関連することを指摘できた。

また、フェニキア・カルタゴ文化の発展と変容という観点から、特に東西の女神崇拜に着目した。信仰が西方へと伝播するにつれて、西地中海域で主に崇拜の対象となったタニトが本土のアシュタルテを凌駕し、次第に汎地中海的属性を備える女神へと変容していく過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、古代地中海世界史の枠組みを、従来の伝統的なギリシア・ローマ史の視点からではなく、これまでわが国では顧みられることのなかったフェニキア・カルタゴ史の視点から問い直し、主に文化的・宗教面での再構成を試みたものである。これは、西洋古代史におけるフェニキア人の果たした役割を再評価し、古代地中海世界の形成に大きなインパクトを与えるものでもある。

毎年年度末に開催した公開報告会では、他の専門分野の研究者とも学際的な交流を構築でき、かつ広く内外に周知することで、研究成果の一端を専門家のみならず広く社会に還元できたことは大きな収穫であったと言える。

研究成果の概要(英文)：This research explored the cultural transformation or acculturation brought about by the Phoenician migration in terms of (1) continuity with the native culture, (2) difference between Phoenician and Punic culture, and (3) persistence of the culture from the Hellenistic to the Roman period. I pointed out that it is also related to various issues relating to the formation and development of Phoenician identity.

I particular paid attention to the worship of goddesses in the East and West in the context of the development and transformation of Phoenician and Punic culture. As the cult spread westward, Tanit, the main object of worship in the western Mediterranean region, surpassed Astarte and gradually transformed into a goddess with pan-Mediterranean attributes.

研究分野：フェニキア・カルタゴ史

キーワード：人の移動 ネットワーク アイデンティティ 交易活動 文化変容 文化接触 物質文化 神話伝承

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題は、連携研究者としてかかわった「フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の東地中海」(2008～2011年度 基盤研究 A 課題番号 20251007 研究代表者 京都大学大学院 泉拓良) 分担研究者として参画した「古代イスラエルにおける一神教の成立過程における考古学的研究」(2008～2011年度 基盤研究 B 課題番号 20401033 研究代表者 慶応義塾大学 杉本智俊) および、自身が研究代表者となった「西方地中海におけるフェニキアとカルタゴ - 宗教的側面からの分析を中心に」(2013年度～2015年度 基盤研究 C 課題番号 25370875) の延長上にある研究である。当初、研究協力者 2 名を含む 3 名の体制で 4 年間の研究期間を予定していたが、2020 年 3 月から深刻化したコロナ禍の影響もあり、2 年間の研究期間延長が認められ、最終的に 6 年間の研究となった。

(2) 本研究の背景には、日本の西洋古代史という学問分野におけるフェニキア・カルタゴ史研究が内包する大きな問題がある。当該研究は研究領域が古代オリエント史とギリシア・ローマ史の両方にまたがり、且つ、フェニキア語やポエニ語で記された史料の僅少性や特殊性により、系統だった専門的研究がこれまでなされてこなかった分野である。しかし近年(特に 1990 年代以降) 地中海各地での考古学的発見やそれに関連した研究成果により、初期鉄器時代の地中海世界にフェニキア人が与えたインパクトや彼らの果たした役割について、大きな見直しがなされるようになってきた。つまり、フェニキア・カルタゴ史は、従来のギリシア史やローマ史の範疇では構築できない、いわば古代地中海世界史を補完する重要な研究分野であると言える。

(3) 連携研究者としてかかわった において、フェニキアの西方への海外発展の諸段階をフェニキア本土に由来する宗教の伝播と関連付けて考察し、西地中海におけるフェニキアからカルタゴへの政治的覇権の転換と宗教的変容が関連することを明らかにした(『紀元前一千年紀におけるフェニキアの海外発展 - 宗教的側面を中心に』『古代オリエント博物館研究紀要』VOL.29/30、65-78、2011)。さらに、自身が研究代表者となった においては、地中海各地に残る遺跡を実際に調査して回り(2013 年 10 月サルデーニャ島、2014 年 3 月スペイン・アンダルシア地方およびイビサ島、2015 年 3 月マルタ島・キプロス島) 博物館等の資料の実地検分や現地研究者との情報交換を重ねた。そして西地中海域においては、「フェニキアの諸相」と「カルタゴの諸相」に明らかな区分があり、一方で在地の文化とフェニキア人がもたらした文化の間には一定の連続性が存在することも示唆できた。

(4) 2013 年 9 月に任意団体「フェニキア・カルタゴ研究会」を設立し、日本におけるフェニキア・カルタゴ史の発展・普及に寄与することを目的に活動を始めた。特に、フェニキア・カルタゴに関する研究会や講演会の開催を計画し、これに伴い、現地調査による新しい知見等の成果は、毎年年度末の公開報告会を通じて(現在まで計 7 回開催した) 広く社会に向けて発信・還元することが可能になった。第 1 回目は 2015 年 1 月に行われ、本科研採択時は 2 回目(2016 年 3 月)までが終了している。

2. 研究の目的

上述の(2)を踏まえて、本研究の究極的目的は、古代地中海世界史を従来のギリシア・ローマ史の視点からではなく、フェニキア・カルタゴ史の視点から新たに問い直すところにある。特に資料や遺物の残存状況を考慮すると、フェニキア・カルタゴ史の文化的・宗教的側面に注目し、フェニキア本土周辺を中心とする東地中海、およびカルタゴを中心とする西地中海の入植拠点を包括的に扱い研究対象とすることで、地中海におけるフェニキア・カルタゴ文化の発展と変容を明らかにすることを目標とした。

3. 研究の方法

(1) 国内外での文献史料の収集とあわせて、実際に現地に赴き、現地調査に重点を置いた。特に今回は、これまでの科研(上記 および)でまだ実際に回ることができていない場所を選定した。2016 年 12 月から 2017 年 1 月にかけて、スペイン(バレンシア・カタルーニャ地方)の博物館を中心に出土遺物等を調査し、イビサ島では Joan.Ramon 博士ら、現地の考古学者の案内のもと、フェニキア関連の遺跡の現地調査を行った。また、2017 年 3 月には、エーゲ海方面(ギリシア本土・クレタ島)において同様の調査を行い、東方のフェニキア文化と西方のフェニキア・カルタゴ文化との類似性・相違性に着目しつつ、地中海世界の文化変容を大きく俯瞰することができた。さらに、2018 年 10 月から 11 月にかけて、スペイン・メリダでの第 9 回フェニキア・カルタゴ国際学会に参加・発表したあと、スペイン・ポルトガルの大西洋沿岸部を

中心に同様の調査を行い、近年明らかにされつつある、地中海を越えたフェニキア人の入植・定住の状況を確認することができた。

なお、2016年のスペイン調査では日野貴裕氏（法政大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了）が研究協力者として同行し、その成果は卒業論文「バルカー族のスペイン政策」および修士論文「カルタゴとイベリアのフェニキア人植民市の関係について」においてまとめている。同様に2018年のスペイン・ポルトガル調査では宮崎麻子氏（東洋大学人間科学総合研究所客員研究員）に研究協力者として同行を仰いだり、その成果は論文として発表済みである。

(2) 可能な限り、海外の関連学会・研究会に参加し、最新の研究動向にアップデートできるよう努めた。特に、毎年11月にアメリカで開催されるアメリカ・オリエンタ学会の年次大会は、近年ではフェニキア・カルタゴに関する最新の情報が入手できる場でもある。2016年のサン・アントニオ大会、2017年のボストン大会では、シチリアやキプロス、さらには南フェニキアに関する最新の発掘調査の状況や研究動向に触れることができ、有意義であった。また、2018年10月にスペイン・メリダで開催された第9回フェニキア・カルタゴ国際学会では、自らの研究成果の一端を口頭発表した。

(3) 国内での関連研究会・学会に積極的に参加し、発表する機会を持つよう努めた。科研遂行中に、16件の口頭・ポスター発表（うち1件は国際学会）を行った。特に第69回日本西洋史学会大会（2019年5月）の小シンポジウムでは自らが企画代表を務め、ギリシア史・ローマ史の研究者も交えて「古代地中海世界における人々の移動とネットワーク - Identity, Ethnicity, Acculturation」と題し、よりグローバルな視点から古代地中海世界の枠組みについて検討した。

(4) フェニキア・カルタゴ研究会の公開報告会を毎年年度末（3月）に開催し、関連する諸分野の研究者の協力も得て、広く社会に向けて研究成果の還元や発信を行ってきた。特に参加対象者を研究者に限らず、関心を抱く一般人に広げたことも功を奏し、ここ数年は100名近くの応募・参加がある。本科研遂行中に、コロナ禍での中止・1年延期をのぞいて、5回開催することができた。また、Oxford大学が発信するメーリングリストを通じて、報告会の内容は日本国内のみならず世界に向けて周知されている。

(5) 研究遂行中の最後の2年間は、コロナ禍により海外調査はむろんのこと、対面の学会の中止・延期が相次いだ。そのような中、新たにオンラインという手段を通じて、Zoomによる学会や研究会の開催が増加した。最近では、対面とオンラインの同時並行によるハイブリッド型開催も行われている。これにより、かえって海外での研究会にもアクセスしやすくなり、これまでの研究を振り返り、整理する良い機会にもなった。上記のフェニキア・カルタゴ研究会もここ2回はZoomによるオンライン開催で行っている。

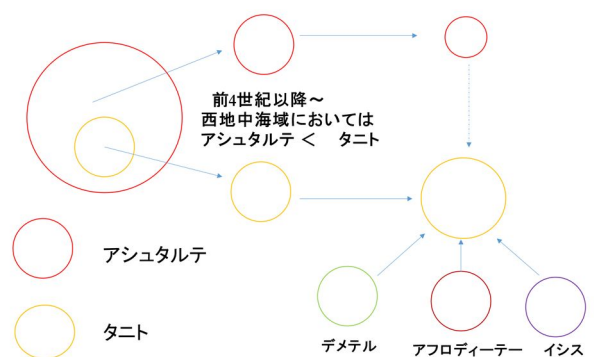
4. 研究成果

(1) 「地中海におけるフェニキア・カルタゴ文化の発展と変容」という観点から特に宗教的側面に着目し、フェニキア本土で崇拝された女神アシュタルテと西地中海域で主に崇拝の対象となった女神タニト（ティニト）についての関係性について考察した。

右図で示すように、本来はアシュタルテの位格の一つとして本土でタニトが出現するが、西方へと信仰が伝播していく過程で、やがて両者はそれぞれ別々の位格を持つ女神として崇拝されるようになる。

前4世紀以降の西地中海域においては、アシュタルテ崇拝は残るもののタニト崇拝に次第に凌駕されていく。地域や場所によっては、アシュタルテ崇拝はタニト崇拝に取り込まれあるいは置き換えられ、ヘレニズム期に入ると周辺から流入したデメテル、アフロディーテーやイシスなどのギリシア・エジプト由来の女神とも習合したタニト女神は、汎地中海的属性を持つ女神へと昇華していくのである（右図参照）。

女神の変容 アシュタルテとタニト



本テーマは、2018年10月の第9回フェニキア・カルタゴ国際学会（スペイン・メリダ）で「The interrelation between Phoenician-Punic goddesses, Astarte and Tanit」と題して口頭発表した研究成果の一部である。学会で得た新たな情報や知見を加味して、いずれ英語論文としてまとめることを目標としている。

(2) 今回の科研では、対象地域を西地中海域のみならず地中海全域に広げ、さらにより長期的波動の中でフェニキア文化とカルタゴ(ポエニ)文化を相対的に考察していったが、その過程において、フェニキア人の特徴ともみなされる「移動」「移住」「移民」という現象に関心が向かっていった。人々の「移動」にともなうさまざまな「文化接触」および「文化変容」のなかで、それがフェニキア人の「アイデンティティの形成や発展」に、いかに作用したかという問題とも関わるものである。

つまり、古代「移民」のさきがけともなったフェニキア人とは「何者」であり、彼らの「存在」が古代地中海世界に果たした役割は究極的に何であったのか。これを解くカギは、移動する側(フェニキア人)からの視点のみならず、彼らを迎え入れる側(在地の人々・先住民社会)の視点も交えて、広範な古代地中海世界の人的・物的交流を通時的に問い直すところにあるのでないかという結論にいたった。それは、文化の連続性・相違性・存続性という3つのキーワードとともに、以下のようにまとめることができる。

前一千年紀、地中海におけるフェニキア(テュロス主導)の海外発展
宗教的伝統の移植 在地の文化
連続性

前6世紀半ば、地中海(中央から西方)におけるフェニキアからカルタゴへの覇権の交替
宗教的伝統の発展 → フェニキアの諸相 カルタゴ的諸相
相違性

ヘレニズム期からローマ期における地中海世界の拡大
宗教的伝統の変容 → ローマ化のなかのフェニキアの・カルタゴ的伝統の存続性

以上の研究成果の一部は、先述した第69回日本西洋史学会大会(2019年5月、静岡大学)において、ギリシア史・ローマ史の研究者も交えてよりグローバルな視点から古代地中海世界の枠組みを考える小シンポジウムでの発表へと繋がっていった。この小シンポジウムの内容を含めた現時点での研究成果は、令和4年度(2022年度)中に出版される学会誌に参加者全員で執筆・公表予定である。

(3) 毎年年度末に開催してきたフェニキア・カルタゴ研究会の公開報告会を通じて、フェニキア・カルタゴ史以外の専門の研究者も交えて学際的な交流が構築できたこと、また専門家以外の多くの一般の方々も参加されたことにより、日本ではこれまで顧みられることのなかったフェニキア・カルタゴ史に対する理解や認知度が深まったことは、大きな意義があったと考えられる。本科研遂行中に実施した計5回の公開報告会について、その概要を以下に簡単に述べる。

第3回 2017年3月：2016年12月から2017年1月にかけておこなったスペイン調査の概報を研究協力者の日野貴裕とともにおこなった。特にスペインにおける文化変容をイスラーム期まで広げ、共和政ローマ期を宮崎麻子氏に、イスラーム期は真道洋子氏(東洋文庫研究員)に発表をお願いした。

第4回 2018年3月：フェニキア人の地中海への海外発展やのちのヘレニズム化やローマ化の過程において、東方と西方では、その文化的アイデンティティはいかに保持されあるいは変容していったのか、碑文や図像、コインなどの分析を通じて考察した。研究会の設立当初以来のメンバーである青木真兵氏(関西大学)は新ポエニ語とラテン語の碑文について、佐藤は図像表現の変遷について、さらに江添誠氏(神奈川大学)はローマ期のコインの分析をもとに発表した。

第5回 2019年3月：同年5月に予定されていた前述の第69回日本西洋史学会大会小シンポジウムの予行演習を兼ねて、古代地中海世界における人々の移動とネットワークがもたらしたものは何か、また、フェニキア人に代表される古代地中海世界の人々の経験が、現代の我々に訴えるものは何かという視点も踏まえながら報告を行った。報告者は長谷川岳男氏(東洋大学)宮崎麻子氏、青木真兵氏、師尾晶子氏(千葉商科大学)、そして佐藤の5人であった。参加者は初めて80名を超えた。

第6回 2021年3月：前年、コロナ禍で急遽中止となった報告会の内容を一部変えて、初めてZoomを利用したオンライン開催で行った。今回は、環境地理学が専門の小方登氏(京都大学)に衛星画像を用いた地形や立地等の観点からの発表をお願いし、従来の文献・考古資料に偏りがちな歴史的側面からのアプローチに一石を投じた。また、卒業論文や修士論文の中間報告など、研究会の報告会を通して若手に発表の機会を与えることができた。佐藤は近年のフェニキア・カルタゴ研究に関する学会動向を簡潔に報告した。

第7回 2022年3月：本科研遂行中の最後の公開報告会は、以前の対面開催に戻すことができるかどうか状況を探っていたが、最終的には前年度同様 Zoom によるオンライン開催となった。今回は初めて二部構成とし、自身が2021年度（令和3年度）より研究分担者としてかわる基盤研究B 課題番号 21H00584「古代ローマ期北アフリカの農業に関する学際的研究」（研究代表者 滋賀大学 大清水裕）との共同開催という形をとった。そのため、第二部はローマ帝政期の北アフリカを舞台とする法学分野からの発表（筑波大学 宮坂渉氏）とした。第一部では現職の高等学校教員（常磐大学高等学校）である丸小野壮太氏に、古代オリエント史との関連で自身の卒業論文をもとにした研究成果の発表をお願いした。オンライン開催により、遠方からの参加者も増え、またこのように様々な分野との連携も構築できたことは、今後の研究の新たな方向と展望へと繋がった。

（4）コロナ禍での2年間は、実質的に海外での研究調査は難しく、新しい発掘成果も十分なものは得られなかった。だが国内外でのオンライン学会の増加は、物理的に不可能であった海外での講演会やシンポジウム、セミナーにも簡単にアクセスすることを可能にしてくれた。特にここ10年あまり、フェニキア・カルタゴ研究は英語圏からの研究論文の増加など、これまでにない大きな飛躍を遂げており、フランス・スペイン・イタリアの研究者を中心とした従来の学問体系自体が大きく構造を変化させている。

日本の西洋古代史と言えば、半世紀以上の学問的蓄積と伝統があるギリシア・ローマ史が主流であり、「フェニキア・カルタゴ史」という言葉さえなかったのが現実である。それは、高校世界史の記述においても同様であったが、高等学校の歴史教育における指導要領の改訂により、今年度からの「歴史総合」に加え、来年度から世界史分野では「世界史探求」が始まる。新しい「世界史探求」の教科書では、フェニキア人を一項目として扱う教科書（第一学習社）もあるなど、高校教育の現場においても大きな流れの変化を感じ取ることができる。

2022年の3月には、神奈川県高等学校教科研究会 社会科部会 歴史分科会の春季研究発表・講演会で、「フェニキア・カルタゴ史から読み解く古代地中海世界」と題して、講演をおこなう機会を得て、高大連携の重要性を改めて認識した。フェニキア・カルタゴ研究会は小さな在野の研究会ではあるが、第7回の報告会の発表者でもあり高校教員でもある丸小野氏は、筑波大学の学部学生時代に第5回の報告会に参加したインパクトから本研究会の活動に関心をもち、自らの高校での実践教育にも役立てたいと意欲的である。研究会の活動がささやかながら社会還元役に役立つのなら、これ以上に嬉しいことはない。

なお、4年に一度開催されるフェニキア・カルタゴ国際学会は、2022年10月に第10回目がスペイン・イビサ島で対面開催されることが決定している。「日本におけるフェニキア・カルタゴ研究会の活動：Activities of the Phoenician-Punic Study Group in Japan」と題して学会発表に応募していたが、この報告書作成中に、開催委員会から発表申し込みを認める旨の通知を受け取った。本科研終了後とはなるが、日本におけるフェニキア・カルタゴ研究の現状とあわせてこれまでの研究成果の一端を報告する予定である。

（5）高度な文明が発達した現代社会において、日本からはるかに遠い西洋（地中海）の古代史を研究する意味はどこにあるのか、古代史研究は遠い過去の歴史ではなく、現在を生きる我々にとってこそ重要な意味があるのではないかと、という思いは、常々研究を進展させていくうえで、いつも反芻してきた自らに対する「問い」でもあった。これに対して、現時点でいくつかの「答え」を用意している。

島国である日本は、フェニキア人が入植した地中海の島々に立地や景観の点で共通項があり、取り巻く海や陸地をめぐる河川交易の視点からも両者を比較して考察することは、今後、地中海から離れた極東の日本からフェニキア・カルタゴ研究を発信していく大きな動機づけとなると考える。

さらに、「移動」が日常的出来事となり、ますますグローバル化する現代社会において、「グローバル化」と一方では「ローカリゼーション」のせめぎあいは必至とも言える。すでに前述の研究成果の（2）で示したように、古代地中海世界においてフェニキア人をはじめとする人々の「移動」がもたらしたさまざまな状況を、現在のわれわれが直面する問題と照らし合わせて考えることは、我々が今後生きていく上でのヒントともなるのではなからうか。

最後に、今後、自分が研究分担者として関わることになる「古代北アフリカの農業」との関連では、本土のテル・エル・ブラクからワイン製造場の遺構が出土するなど、近年のレバノンでの発掘成果は、フェニキア・カルタゴ史の産業・経済的側面に、商業面だけではない農業面からのアプローチも可能であることを示唆するものであった。

以上を、今後の研究課題としてさらに考察を深めていきたいと思っている。

また、本科研遂行中に果たせなかった研究会の研究雑誌の刊行を目指して努力を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐藤育子	4. 巻 67
2. 論文標題 書評 Josephine.Quinn, In Search of the Phoenicians	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 127-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮崎麻子	4. 巻 21
2. 論文標題 都市コルドバの起源とローマ化 - ローマ帝国先住民研究に向けて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 225-241
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 2件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 古代地中海世界における知の動態と「文化的記憶」に対するコメント：失われた記憶 - 他者の眼を通しての記憶の再生
3. 学会等名 第71回 日本西洋史学会大会 小シンポジウム 古代地中海世界における知の動態と「文化的記憶」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 フェニキア・カルタゴ研究の現状と課題
3. 学会等名 フェニキア・カルタゴ研究会第6回公開報告会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 古代地中海世界におけるフェニキアの宗教の発展と変容
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウム 古代地中海世界における人々の「移動」とネットワーク -Identity, Ethnicity, Acculturation-
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 地中海を越えたフェニキア人の活動 - 伝承と考古学の狭間で -
3. 学会等名 第26回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 フェニキアの海外発展 - アイデンティティとネットワークの変容
3. 学会等名 フェニキア・カルタゴ研究会第5回公開報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikuko Sato
2. 発表標題 The Interrelation between Phoenician-Punic goddesses, Astarte and Tanit
3. 学会等名 9th International Congress of Phoenician and Punic Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 地中海におけるフェニキア・カルタゴ関連遺跡
3. 学会等名 第25回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 地中海におけるフェニキア・カルタゴ文化の伝播と影響 - 宗教的側面を中心に
3. 学会等名 フェニキア・カルタゴ研究会第4回公開報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 図像表現にみるフェニキアの宗教の発展と変容
3. 学会等名 第59回日本オリエント学会大会 「企画セッション」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 古代地中海におけるフェニキアの海外発展とその背景
3. 学会等名 シンポジウム「古代ギリシア・地中海世界の都市発展と経済繁栄」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 地中海域出土の女神について
3. 学会等名 第24回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 スペインにおけるフェニキア・カルタゴ文化の発展と変容 - 博物館資料を中心に -
3. 学会等名 フェニキア・カルタゴ研究会第3回公開報告会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 女神の変容:地中海におけるフェニキア・カルタゴの宗教の伝播(ポスター発表)
3. 学会等名 第58回日本オリエント学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 フェニキア・カルタゴ世界における「幼児犠牲」について
3. 学会等名 第23回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 フェニキア人の海外発展 - 地中海の事例を中心に - (ポスター発表)
3. 学会等名 第66回日本西洋史学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 佐藤育子
2. 発表標題 フェニキア・カルタゴ史から読み解く古代地中海世界
3. 学会等名 神奈川県高等学校教科研究会 社会科部会 歴史分科会 春季研究発表・講演会(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 周藤芳幸 安川晴基 河江肖剰 田澤恵子 中野智章 高橋亮介 山花京子 長田年弘 佐藤昇 師尾晶子 澤田典子 佐藤育子 川本悠紀子 羽賀京子 小坂俊介 福山祐子 桜井万里子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 464
3. 書名 古代地中海世界と文化的記憶	

1. 著者名 神崎忠昭 長谷部史彦 佐藤育子 杉本陽奈子 長谷川敬 原田亜希子 飯田巳貴 押尾高志 奥美穂子 山道佳子 野口舞子 藤木健二 勝沼聡 師尾晶子 草生久嗣 黒田祐我 太田(塚田)絵里奈 錦田愛子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 321
3. 書名 地中海圏都市の活力と変貌	

1. 著者名 鈴木董・近藤二郎・赤堀雅幸他 編 佐藤育子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 775
3. 書名 中東・オリエント文化事典 「フェニキア語とフェニキア人」(分担執筆)	

1. 著者名 栗田伸子 佐藤育子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 台湾 有限公司 八旗文化	5. 総ページ数 478
3. 書名 迦太基與 海上商業帝國	

1. 著者名 栗田伸子 佐藤育子	4. 発行年 2016年
2. 出版社 講談社(学術文庫)	5. 総ページ数 445
3. 書名 通商国家カルタゴ(興亡の世界史03)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

フェニキア・カルタゴ研究会
<http://phoenician-punic.pya.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	宮崎 麻子 (MIYAZAKI Asako)		
研究協力者	日野 貴裕 (HINO Takahiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関